

注(1)記号の意味は以下の通り

米 ■ 小麦 ■ 雑穀 ■ その他の穀物加工品 ■

(2)棒グラフ上の数値は穀物の個人消費支出額(1988/89年度:ルピー)

出所)Govt. of India, A Note on Consumer Expenditure Survey (All India):44th Round(1988/89) Delhi 1990



小麦粉を水練りした“ドゥ”を揚げて“プーリー”をつくる都市の婦人。“プーリー”は“チャパティー”と並ぶ代表的な小麦加工品である。カレーにも合う。

インドの料理店は肉食主義と菜食主義の2系統に分かれている。肉食主義の料理店では羊、鶏、魚料理が、菜食主義の場合には野菜カレー、豆カレーと乳製品が主体となっている。

「地域やカーストにより『主義』は異なりますが、インド全体では肉食主義者の人口の方が多いといわれています。しかし、肉食主義者の場合でも毎日肉を食べてはいるわけではなく、家庭ではやはり豆カレーと乳製品が食

## インドの国民食は豆カレーと乳製品



ヨーグルトの攪拌により原バターをつくる農村の婦人。

現象です」

牛に出会わずにインドを旅することは、ラクダが針の穴を通ることよりも難しい。それもそのはず、インドには2億頭もの牛が分布しているからである。雄牛は農耕用に、雌牛はミルクと繁殖用に飼育されている。これだけの頭数があるながら、牛屠殺と牛肉食に対するタブーがあるために、牛肉市場は発展しなかった。



### 篠田隆 (しのだたかし)

国際関係学科助教授  
神奈川大学大学院を修了後、インドのグジャラート大学に留学。丸4年間に滞在。その後も頻りにインドに向かい、通算滞在期間は7年を超える。「豆料理もインド名物のひとつ。豆を食べないと、食事をした気がしないんです」と笑う。

卓の主役になっています」

インドには世界の主要な豆類のほとんどが揃っている。豆類は蛋白質・ビタミンに富み、乾燥させると保存もきく。豆類の加工を容易にするために、水さらしのほかにひき割りや製粉の処理を施す。

乳製品も国民食といえよう。生乳の熱加工や酸添加およびヨーグルトの攪拌により、バター、ギー(動物性油)、クリーム、チーズなどができる。乳加工文化の広がりや深さは、家庭でこれらが日常的に製造されていることに端的にあらわれている。

主食や副食の地域格差や階級格差は大きいものの、インドの食体系はカレーに収斂する体系とまとめられよう。カレーを根幹とする食体系は現在もインド人の食文化を支配しているが、その実態は、私たちの想像をはるかに超え、奥が深いのだ。





# ASIAN DYNAMICS

## 今や江戸前ではない 江戸前寿司

江戸前寿司とは本来、江戸の前、つまり「東京湾で採れたネタを使った寿司」のことだ。しかし、現在ほとんどのネタは輸入に頼っている。

例えばエビ。1960年の日本のエビ輸入量は、わずか625トンにしか過ぎなかった。ところが1991年には29万トンと、450倍以上に膨れ上がっているのだ。現在、日本人の食べるエビの90%は輸入エビである。また、その消費量も驚異的である。日本人は一人当たり年間で2・7キログラムものエビ

# マングローブが泣いている

『エビ乱獲が教える東南アジアと日本の関係』

今着ている服のタグを見て欲しい。今はいている靴の生産地を確認して欲しい。そこには、マレーシア、インドネシア、タイ、シンガポール、台湾など、東南アジア各国の名前が記されているはずだ。アメリカブランドのリーボック、ナイキでさえ、生産は東南アジアで行っている。東南アジアは今や、世界の工場なのだ。しかし、その影響は私たちが考えもつかない傷痕を東南アジア地域と人々の心の中に残すことになる。

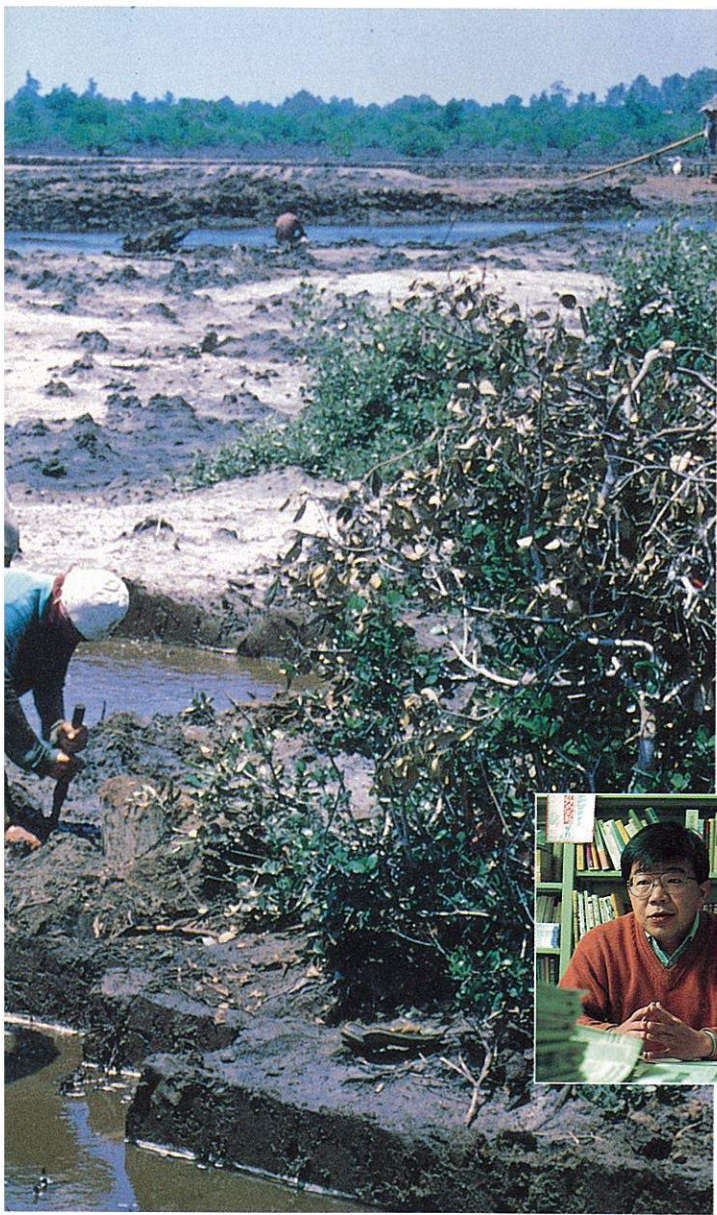


photo (3点)「奪われたエビ」アジア太平洋資料センターより

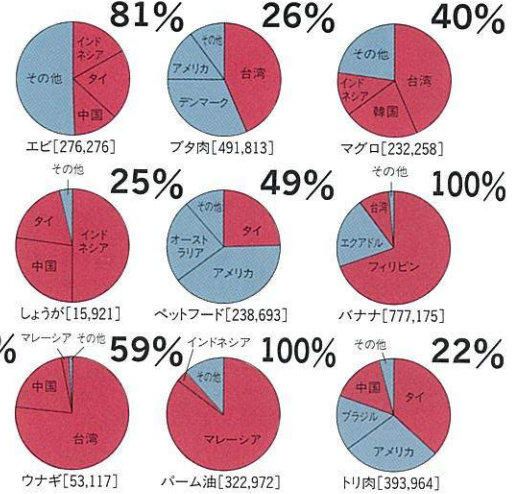


**福家洋介** (ふけようすけ)  
国際関係学科助教授  
エビ、マグロ、古着貿易の研究のために東南アジアに滞在するなど徹底した現場主義の手法によって研究を重ねる。「歩く、見る、そして聞くことから自分で考える方法を身につけてほしい」という。



日本に輸出される冷凍エビ。日本のエビ消費量は約29万トンにのぼり、これは世界のエビ市場の3分の1を占める。

日本の食料輸入 (1992年)



エビ輸入量と輸入価格

|       | 輸入量<br>(1,000kg) | 輸入額<br>(1,000ドル) | 輸入単価  |       |
|-------|------------------|------------------|-------|-------|
|       |                  |                  | ドル/kg | 円/kg  |
| 1960年 | 625              | 235              | 0.38  | 137   |
| 1965年 | 21,011           | 12,938           | 0.62  | 223   |
| 1970年 | 57,146           | 13,703           | 2.40  | 864   |
| 1975年 | 113,672          | 463,348          | 4.08  | 1,211 |
| 1980年 | 143,256          | 1,062,770        | 7.42  | 1,737 |
| 1985年 | 182,805          | 1,330,638        | 7.28  | 1,720 |
| 1990年 | 286,802          | 2,545,689        | 8.88  | 1,411 |

(出所) 日本消費者連盟「飽食日本とアジア」家の光協会、1993年。

を食べている計算になるが、これは大きなエビが2尾入った天井を日本人全員が週に1回は食べているということになる。また同時に世界の冷凍エビ市場の3分の1を消費していることを意味している。

日本市場のエビは、ほとんど

(出所)「グローバルネット」(地球・人間環境フォーラム、1994年3月号より)。



東南アジアから輸入されている。日本のエビ輸入が増大したのは、円高が原因である。70年に変動相場制になり、円が強くなり国内で生産するよりも海外から調達するほうが安くつくようになった。とにかく安いところからものを調達するのは日本企業の得意とするところである。

当時、日本が輸入するエビは、トロール漁によって採られていた。しかし、日本が輸入する量は膨大で、乱獲によってエビが少なくなってしまうのに時間はかからなかった。海のエビ資源が減少すれば、エビを養殖すればいいと、資本家たちは考えた。エビが育つのに適した環境は、淡水と海水が適度に混じり、栄養価の高い水があるところだ。海に川が流れ込み、海岸にマングローブが生い茂る場所は、エビの養殖に最適だった。そしてマングローブは各地で伐採され、養殖池が作られた。そこでは人工飼料と化学薬品が大量に投入されている。

## 1日200円で働く エビ養殖労働者

「企業の東南アジア進出は、現地経済の発展に寄与している」というが、注意深くみる必要がある」と、福家洋介助教授(国際関係学)は言う。

確かに、現地工場やエビ養殖場の建設は、雇用促進につながる。だがその一方で漁業資源の

マングローブ林を伐採してつくられる養殖池。



エビ養殖池はマングローブ林を破壊するだけではない。現地の天然資源と労働力をも奪っている。

世界のエビ養殖の国別生産量(1990年)

| 国別     | 比率%  | 生産量<br>1,000 t | 養殖面積<br>ha | 養殖場数   |
|--------|------|----------------|------------|--------|
| 中国     | 23.7 | 150            | 150,000    | 1,000  |
| インドネシア | 19.0 | 120            | 300,000    | 3,000  |
| タイ     | 17.4 | 110            | 60,000     | 3,000  |
| エアドル   | 11.5 | 73             | 100,000    | 1,500  |
| フィリピン  | 5.1  | 32             | 60,000     | 2,000  |
| ベトナム   | 4.7  | 30             | 50,000     | 3,000  |
| 台湾     | 4.7  | 30             | 160,000    | 1,000  |
| シンガポール | 4.7  | 30             | 8,000      | 2,000  |
| ブラジル   | 4.0  | 25             | 100,000    | 1,000  |
| その他    | 1.6  | 10             | 10,000     | 120    |
| その他    | 1.5  | 9.5            | 11,000     | 90     |
| その他    | 1.3  | 8.5            | 5,500      | 565    |
| その他    | 0.8  | 4.9            | 8,450      | 95     |
| 合計     | 100  | 632.9          | 1,022,950  | 18,370 |

(出所)日本消費者連盟編 飽食日本とアジア 家の光協会 1993年より。

枯渇は、とくに沿岸零細漁民の仕事を奪っていることになる。一人当たりのGDPは増えるが、一方で貧富の格差が大きくなる。しかも活用している技術はほとんど外国のものだ。例えば、豊

富な水産資源だったエビを乱獲によって採れなくなったトロール技術や大型トロール漁船は日本製である。養殖場の建設技術も養殖技術も日本や台湾から持ち込まれた。もし仮に、日本がエビの輸入を一切やめたらどうなるのか。後に残るのは、養殖場建設で抱えた多額の負債と職場と収入を失った労働者。そして無残に伐採されたマングローブだ。そして、日本企業は何の補償も行わない。

福家助教授は語る。

「インドネシアは元々エビが採れるところですから、現地の人もエビを食べていたんです。スリランカではエビカレーなん

ていう名物もあったほどです。

それが日本の大量輸入によって価格が高騰して、現地の人はエビが食べられなくなった。エビカレーもなくなりました」

今インドネシアでのエビの価格は、1日エビ養殖場で重労働した賃金で、ようやく4尾のエビが買えるくらいだという。日本では1時間働けば20尾以上のエビが買える。

## マングローブは帰って来ない

東南アジアがエビの輸出を始めた理由は意外なところにある。例えばインドネシアは、輸出の7割が石油だった。その石油

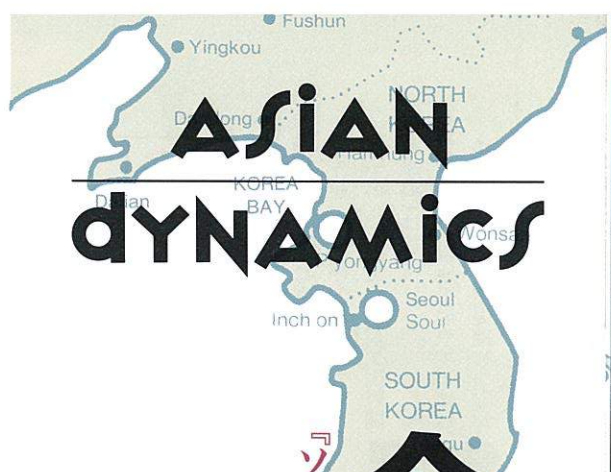
価格が暴落したため、外貨獲得の代替輸出品としてエビが選ばれた。エビ輸出には、巨額の投資を必要としなかった。最近ではマグロも輸出に「貢献」している。ここには日本だけでなく、台湾、韓国などのNIEES(新興工業経済地域)も参入している。言ってみればインドネシアは自国の天然資源を削り続けてきたのだ。

エビは日本人にとって欠かせないものだろうか。江戸前寿司を食べるとき、おそらくそんなことをいちいち意識してはいないだろう。だが実態は、そのエビ1匹が東南アジアの資源、環境、そして労働力を奪いつつあるのだ。そしてこれは、何もエビだけの話ではない。海外の天然資源を安く大量に求めることで成り立っている日本人の消費生活は、東南アジアばかりか世界中に大きな影響を及ぼしているのである。

身の回りにある商品のタグをもう一度見てみよう。その背後にある事実まで。



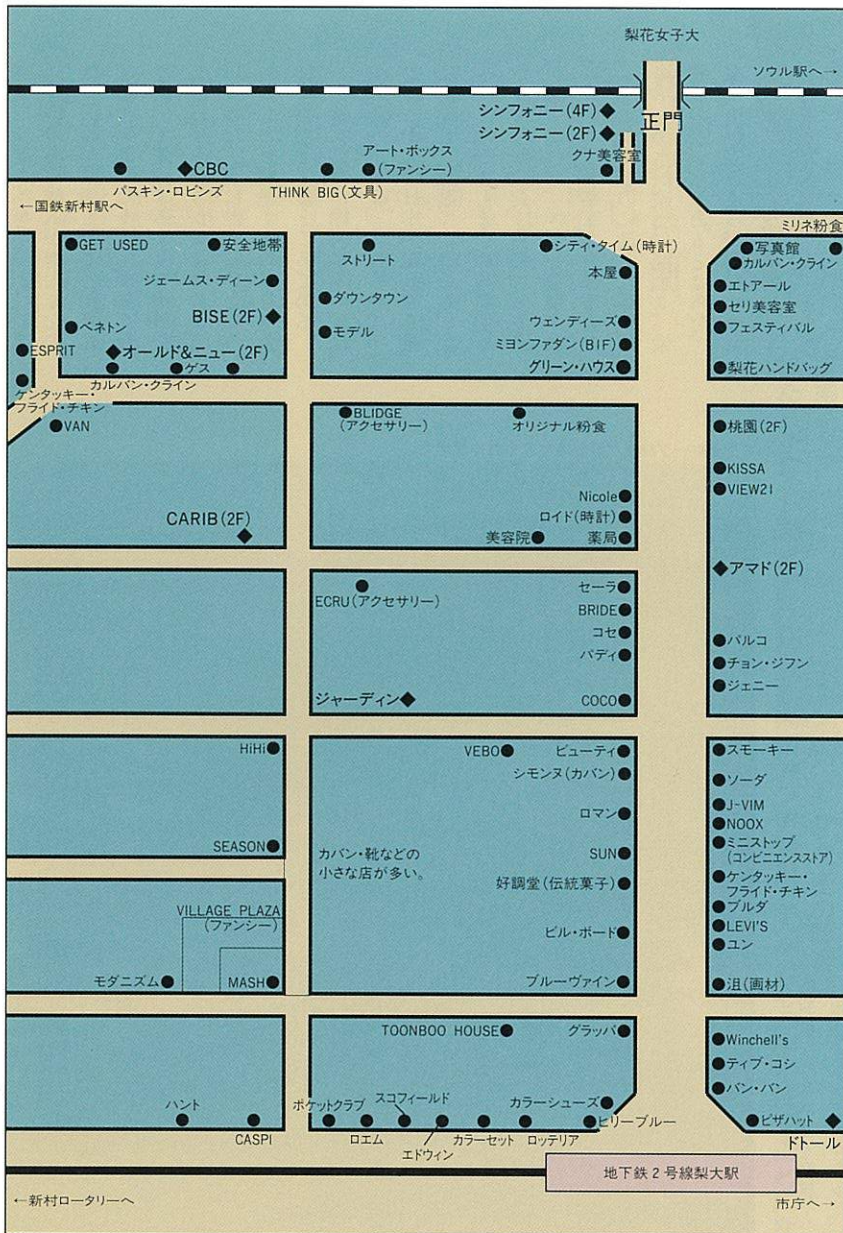
# ASIAN DYNAMICS



# 合コンだつて真剣です

『ソウルで最良の伴侶を見つける方法』

こちらは明洞の繁華街。かつて若者文化の発信地だったこの街も、今では梨花大学付近や大学路、江南、新村などの新興文化圏にその地位を脅かされている。



## 欧米文化と 儒教を 合わせ持つ 『新世代』

韓国の首都ソウルで最も若者の話題を集めるスポット、それは梨花女子大前だ。

品行方正、学力優秀、容姿端麗で家柄もよい女子大生が揃う韓国一の名門女子大。梨花女子大の近辺には、彼女たちが好むファッションが、そしてオシャレな店が集まる。そんな彼女たちをナンパするために男たちも集まる。韓国ではこうした世代の行動を幾分揶揄気味に『新世代』と呼ぶ。日本で言うところの『新人類』に当たる、最近の新語だ。彼らが現代のソウルの、そして韓国のサブカルチャーを作り上げている。

梨花女子大近辺では、喫茶店などで昼間から合コンパが催される。また『グンハプ(宮合)』と呼ばれる相性占いも盛んだ。これらがつまみは日本の場合と少々違う。

「儒教の教えの影響で離婚が基本的にしにくい国ですから、伴侶探しにも真剣なんです。合コンに積極的に参加するのも、最良のパートナーを捜し当てるためです」

今年も年に2回は韓国に帰国する李妍淑専任講師(国際関係学科)は説明する。

オープンに付き合うカップルは増え、良い就職、より良い伴侶を得るために、美容整形を行う。『新世代』のこのような行動パターンは、オープンな欧米文化を吸収しながら、伝統的な儒教精神が根底に流れる現代のソウルそのものを象徴していると言っている。

今年の3月、朝日新聞にこんな記事が掲載された。

「ソウル市内のある喫茶店が、若いカップルの『目に余る愛情表現』に業を煮やし、成人男女が横に並んで座ることを禁じた。店主は『キス程度なら許せるが、外国のポルノ映画まがいの愛情表現は許せない』と語った」

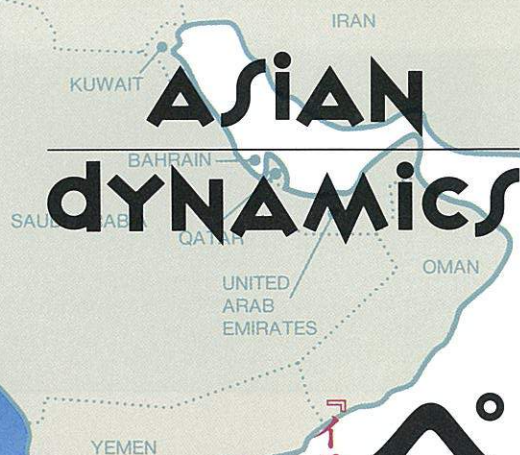
おそらくこの店主には『新世代』と呼ばれる年頃の子供がいるに違いない。そして我が子に、儒教の教えを每晚説くのだ。



**李妍淑**(イヨンスク)  
二葉亭四迷や白樺派など日本の近代文学研究のため東京大学に入学。後に一橋大学の博士課程(社会言語学)を修了し、以来13年間、日本に滞在中。



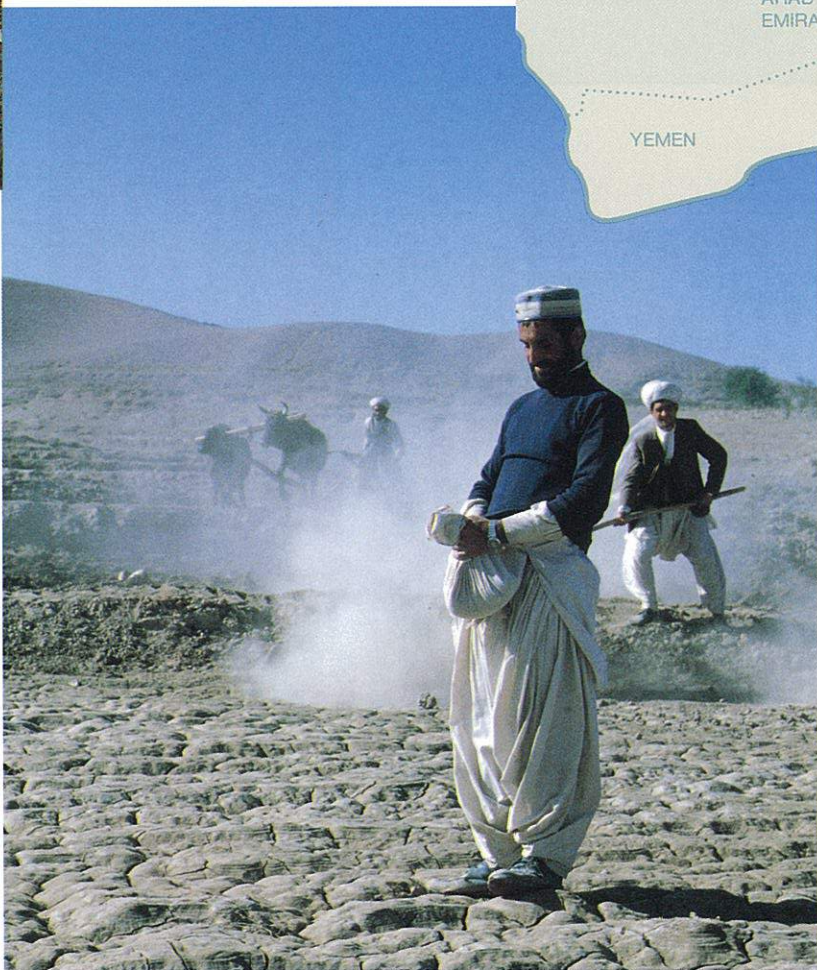
# ASIAN DYNAMICS



# ペルシアの職人たち

『イラン農村の絨毯工房から』

ペルシア絨毯に囲まれて座る原教授。だがこの貴重な文化遺産も、後継者不足によって存亡の危機にさらされている。



多くの絨毯職人は農業と兼業する。

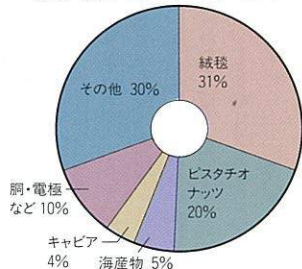
**ペルシア絨毯は石油に追いつけるか？**

ペルシア絨毯が高級品として世界的な評価を得るようになったのは、18世紀から19世紀にさかのぼる。地元のイランでは絨毯は借金の担保にもなる、日本

で言えば不動産並の財産だった。ペルシア絨毯は、その独特の幾何学模様が醸し出すオリエンタル的イメージが特徴である。伝統美とも呼ぶべきこの織り方は、世界中の人々を魅了し、イランの代表的産業のひとつに育った。最近、ペルシア絨毯が積極的に輸出されるようになった。そ

これは石油価格の下落によって、外貨収入のほとんどを石油に依存していたイランが、国策として非石油製品の代表であるペルシア絨毯の輸出振興をおこなうようになったためである。現在、イランの非石油製品の輸出比率で、ペルシア絨毯は31%を占めている。

非石油製品輸出シェア (総輸出額約160000000000) 1989年



だがその最大の外貨獲得商品にも、暗い影がしのびよっている。

ペルシア絨毯は、基本的にすべて手織りだ。1枚織り上げるのに3〜4カ月はかかる。技術的にも、幼少時から職人の元に弟子入りし、長年の修業が必要だ。だが絨毯職人は、低賃金できつい、汚い、危険という、いわゆる「3K」職である。加えて教育改革によって児童就学率が上がり、職人になりたがる人間は激減した。他方で、石油価格は安値安定を続けている。石

油以外の輸出商品としては今のところ絨毯に頼らざるをえない状況にある。就学率も上げたいが、職人の後継者も育てたい。

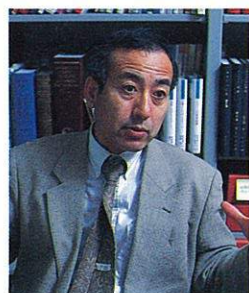
こうした国策の矛盾が、伝統産業発展の足を引っ張っている。

後継者不足の解決策のひとつとして、都市部では日本製機械織機による絨毯織りがはじまっている。だが手織り独特の質感あるいはひと織りに込められた職人の思いを持ち得ない機械織り絨毯は、ペルシアの名を冠することはできないだろう。伝統的手織りペルシア絨毯の将来はこれからどう展開していくのだろうか。

イランの総人口約5000万人

絨毯製造従事者 約800万〜1000万人

全人口の約1/5が絨毯製造業に関わっている。



**原隆一** (はらりゅういち)  
イラン東部のビルジャンド地方の農村に滞在し、絨毯工房を調査した経験がある。大学の研究室にはエンジ色のペルシア絨毯が敷かれている。



# アジアってのは、行くしかないんだ。 行かない限り、近づけない。

新納豊助教授に聞く、アジアの魅力と学びのスタンス

中国、インド、韓国、インドネシア、イラン……  
これら学部案内で登場した国々のほかに、  
アジアには話題の尽きない場所や民族文化は多い。  
「21世紀の世界経済の主役」と目されるアジアを学ぶとは  
どういうことなのか。あるいはどう学ぶのか、何が魅力なのか。  
アジアを「教える」立場にある新納豊助教授に、  
その魅力と学びのスタンスを伺った。

「アジアと一口に言ってもその長い歴史の中でさまざまな変化がありました。アジアの定義のようなものはありますか。」

「定義は多々あるでしょうが、われわれの軸足はつねに日本にありますから、これまで日本がアジアをどのように見てきて今日に至っているかという問題と無関係ではないでしょう。例えば岡倉天心が語るアジアとは、精神的なつながりから見たアジアでした。非ヨーロッパとも換言できます。当時はアジアとは「ヨーロッパでない」ことを言っただけですね。精神的なつながりというのは、結論だけ言いますと「アジアの抵抗」とでもいうべきものだったと思います。この認識はある程度の広がりを持っていて、中国の魯迅が東欧文学にこだわったのもそこに

「アジア」を見出したからと言っていいでしょう。」

「では、現代のアジアはどう捉えたいのでしょうか。」

「思想、文化、宗教、民族、風土、産業など様々な点で現代のアジアは多様化の時代にあります。ですからかつてのように精神的なつながりによって定義をするのは困難です。言えることは、これまで受身的に定義されてきたアジア諸地域が、今後ますます発言力を増して行くだろうということ。多様化の意味もそこにあります。私自身は何事につけ定義から入っていくのは好きではありません。初めから視野をせばめることになりません。とりあえず地理的にアジアをとらえるとしても、問題は残ります。例えば新聞やテレビなどマスコミはサウジアラビアやイラン、エジプトなどを中東と呼んで、パキスタン以東のアジアと区別しているようですが、当大学では中東を西アジアと呼びアジアの一員として勉強しています。」

「日本は地理的にはアジアですが、世界的には西側諸国の一員として認識されています。」

「日本は民族あるいは文化的にはアジアそのものですが、生活の価値観や市場経済のシステム、あるいは社会構造などの点においては極めて欧米的になっています。また歴史的には、かつて「アジアの抵抗」に名をかりて「大東亜共栄圏」までつづばしり、その実際はアジアに対する植民地支配と侵略戦争で物心両面にわたる被害を及ぼしました。しかもそれにフタをしつづけていますから、不信感を向けられるのも当然でしょうね。」

「その日本が、アジアの発展のために果たすべき役割はどういったことが考えられますか。」

「JICA(ジャイカ)・国際協力事業団の海外青年協力隊や各種の民間ボランティア団体(NGO)などがアジアの各地で援助活動をしています。またODA(政府開発援助)など経済開発事業もさかんに行われています。こうした様々な国際協力は、マクロな視点で見ればアジアの発展に寄与するところでしょう。国民生活が豊かになることを拒否する国はありません。現場で観察した一般的な印象としては、青年協力隊や民間ボラ





ンティア等の小規模な援助活動は想像以上に成功しているのに、現地で国家プロジェクトになっているような大規模なものには評判が悪いですね。小規模な活動には現地社会との双方向のコミュニケーションが重要です。村びとの協力や参加がなければ一歩も動けないわけですから、隊員も三カ月くらいで最低限の現地語をマスターします。そしてこまごまとした難題を試行錯誤する。すると村びとのほうが見るに見かねてアイデアを出してくれますね。この過程で発揮される『気配り』のようなものは、日本が世界に誇ってもいいものだと思います。日本文化は世界標準で見れば田舎者ですから、ムラてくらすには長けている(笑)。しかも、こういう経験をつんだ人々が日本に帰ってくるという点がまた重要だと思います。

「アジアを勉強する時に必要な知識や素養のようなものはありますか。」

「海外のことを学ぶ時は、まずその土地に行ってみることが大切だと思います。行かない限りは近づけない。そして一度海外のある国を訪れた者は、その国の悪口を言わなくなる。で、気が付くとハマっているわけですが(笑)。知識は豊富であるにこしたことはありませんが、大所高所からのものではなく、現場に即応し得る身に付いたものでなければ空回りします。したがって好奇心や忍耐力そして基礎体力といったものが伴わなければならないですね。特別なものは何もないという事です。蛇足になりますが、ごさかしい知識はじやまになります。」

「先生は朝鮮半島の研究が中心ですが、韓国以外にも数多くの国を訪れています。それはなぜでしょうか。」

「実際は、たまたまそうなったというだけなんです(笑)。韓国だけ学んでも韓国は見えてこないでしょう。他の地域を学ぶことによって初めて韓国のポジションが見えてくるんです。ですから学生諸君も視野を広げて学んでほしいですね。これは私の専門じゃないから勉強しない」というのではまずい。」

「最後に、先生にとってのアジアの魅力とは何でしょうか。」

「ひとこと言えば、私を実用的な人間に鍛えてくれたということでしょうか。貧乏旅行をしてみればわかりますが、金も力もない人が現地で壁にぶつかれば、相手に身をゆだねるしかないんですね。大の字になって『さあ殺せ』と、つよがつているうちは友達もつくれませんよ。そして仲間をもてない人は、何事もなし得ない。授業なんかやっているといますよ。先生もつと実用的な事を教えて下さい』なんて人が。マニュアル本のようなことを考えている場合が多いんですが、私は『お前さんたちこそ早く実用的な人間になってくれ』と言っています。マニュアルなんて、ちよつとアルバイトしてみれば分るはずですが、実用的ではあり得ない。ファミリー・レストランでの『ご注文を繰り返します』なんてあれも欲しい、これも欲しいなんて人間とはつきあえない。何か欲しいものがあれば、まず何かを捨てることですよ。こんなことを教わりましたね。」

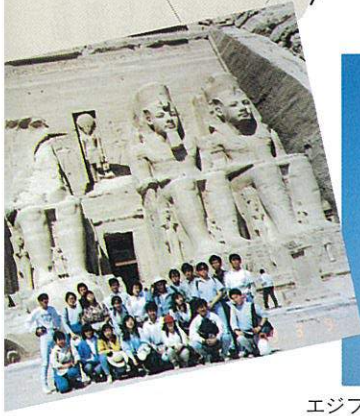


新納豊(にいのちゆたか)

高校2年の時にアジアへの興味が芽生える。現在、主要な研究テーマは朝鮮半島にかかわるものだが、中央アジア、西アジア、西アフリカなど、これまでに訪れた国は20を下らない。徹底した現場主義を貫き、アジアの研究で必要なのは体力と言ふ。



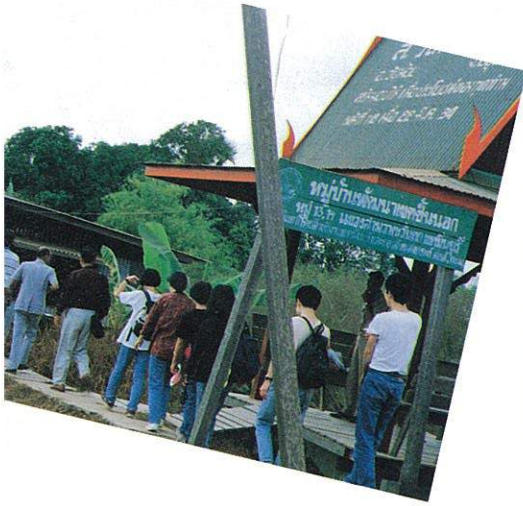
## 海外研修



エジプト



ベトナム



タイ



イラン

1994年度 国際関係学部現地研修

| 実施大学<br>(地域言語)       | 国<br>(地名)         | 研修期間/日数                           |
|----------------------|-------------------|-----------------------------------|
| 高麗大学校<br>(コリア語)      | 韓 国<br>(ソウル)      | 1994年7月25日(月)<br>～8月13日(土)/20日間   |
| 上海師範大学<br>(中国語)      | 中 国<br>(上海)       | 1994年7月25日(月)<br>～8月22日(月)/28日間   |
| パジャラン大学<br>(インドネシア語) | インドネシア<br>(バンドゥン) | 1994年8月19日(金)<br>～9月9日(金)/22日間    |
| 北京大學<br>(中国語)        | 中 国<br>(北京)       | 1994年8月27日(土)<br>～9月24日(土)/29日間   |
| チュロンコン大学<br>(タイ語)    | タイ<br>(バンコク)      | 1994年10月9日(日)<br>～10月29日(土)/21日間  |
| シーラーズ大学<br>(ペルシャ語)   | イラン<br>(シーラーズ)    | 1994年11月3日(木)<br>～11月28日(月)/26日間  |
| ラジャスターン大学<br>(ヒンディ語) | インド<br>(ジャイプール)   | 1994年2月23日(木)<br>～3月16日(水)/22日間   |
| カラチ大学<br>(ウルドゥ語)     | パキスタン<br>(カラチ)    | 1994年11月7日(月)<br>～12月4日(日)/28日間   |
| モロッコ大学<br>(アラビア語)    | モロッコ<br>(ラバト)     | 1994年11月10日(木)<br>～11月22日(火)/13日間 |
| ハノイ総合大学<br>(ベトナム語)   | ベトナム<br>(ハノイ)     | 1994年11月16日(水)<br>～12月10日(土)/25日間 |

## 現地からの声

### ナイルの水を 飲んだ者は 再び ナイルに戻る

現在私はエジプト高等教育省の奨学生として、カイロでアラビア語を勉強しています。でもエジプト政府からいただいている奨学金はスズメの涙。月に数回、観光ガイドをして生計を立てています。

大学に入学し、選択した語学はアラビア語でした。アラビア語は20か国以上で話されている言葉で、国連の公用語のひとつでもあります。またほかの大学では学べない語学を選択したいという思いもありました。

アラビア語を勉強して2年が経過し、いざ現地研修へ。道で、ホテルで、知っているアラビア語を並べて使ったのですが、ほとんど通じませんでした。通じなかった理由は色々となりましたが、初めてのエジプトで味わった屈辱感は計り知れませんでした。帰国後もアラビア語の勉強を続け、今だに学び続けているというわけです。

エジプトに来て1年半が経過しました。「郷に入ったら郷に従え」の精神で、毎日を過ごしています。



大塚光子

'92年 国際関係学部卒









# 大東文化大学

国際関係学部

板橋校舎 〒175 東京都板橋区高島平1-9-1 ☎03(5399)7800(入試部入試課)

東松山校舎 〒355 埼玉県東松山市岩殿560 ☎0493(31)1513(国際関係学部事務室)